

御とあはれこれ

郷土館だより
第16号

五日市町立
発行 五日市町郷土館 東京都西多摩郡五日市町五日市920-1 電話 0425-96-4069 有線4607

人と馬との連帯と共存

五日市町の石造物 その2. 馬頭観世音について



はじめに

檜原村には「男に生まれたら炭を焼け、女に生まれたら馬を曳け」といういい伝えがあったそうだ。男の焼いた炭を五日市の炭問屋へ運ぶのは女の仕事というのである。檜原の奥から五日市までは5、6里（20～24キロ）もある。炭を積んだ馬は集団で五日市へやってきたが、五日市には馬のドライブインに当る馬宿が幾軒かあった。馬宿の古老に聞くと、たしかに馬方の群の中には半裸のたくましい女衆も混っていたという。山道は手車が使えないので牛馬に頼らざるを得ない。けわしい尾根通りや、すべり易い谷川の丸木橋をわたるにつけ、人馬一体となって必死の思いで炭荷を運んだものらしい。

昭和52年発行の「檜原の石仏」第3集には同村内の馬頭観世音が155基収録されているが、人と馬とののびきならない連帯共存の生きざまを反映した数字といえる。

五日市で一番古い馬頭観世音 左図解 開光院

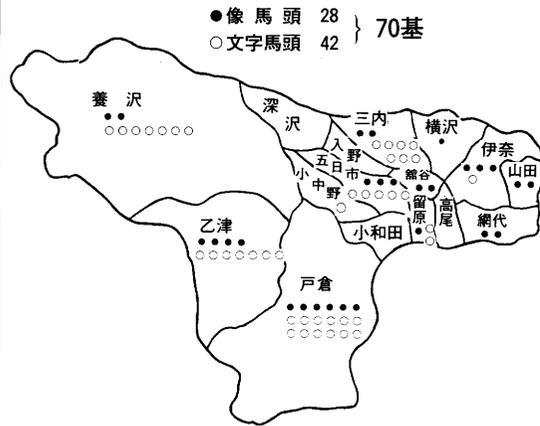
わが五日市町では目下70基が見つかった。調査洩れもあろうし、もともと馬頭さんは馬の難所に当る崖道や、急坂の周辺に建てられることが多いから、崖崩れや、道路改修で失われる率が高い。実数はもっと多かつたであろう。調査の際墓地の隅などに捨てられた馬頭像の破片をみることもあった。いずれにせよ五日市地区は周辺を山に囲まれているだけに、馬への依存度が高く、專業の馬方も多かつたから馬頭観世音の造立は相当数あって当然なのである。

馬頭さんとは何か さて、馬頭観世音とは一体何ものであろうか。観音は33変化して衆生を済度するというのが、その変化観音の1つで、馬の頭部を冠として戴くのは、周囲に群がる悪魔どもを馬のように蹴ちらす勇ましい観音菩薩だからという。像容は概ね一面六臂（顔が1つ、

表1 地区別・年代別馬頭観音一覧 ●像馬頭 ○文字馬頭

年代	地区	養沢	乙津	戸倉	小中野	五日市	館谷	留廓	三内	横沢	伊奈	山田	網代	計
1750~1779 寛延3~安永8		●				●								2
1780~1809 安永9~文化6			●●		●	●		●			●			7
1810~1839 文化7~天保10		●	●	●			●	●			●	●		10
1840~1869 天保11~明治2		○	○●	○							●	●		16
1870~1899 明治3~明治32				○										5
1900~1929 明治33~昭和4		○	○	○		○		○	○	●				12
1930~1959 昭和5~昭和34		○		○	○	○								6
不詳		○	●●●	●●●		●			●				●	12
計		9	11	18	1	8	2	3	9	1	4	2	2	70

表2 馬頭観音分布図



手が6本)で、髪は逆だち、目は3眼で牙をむき出す忿怒の相をしており、手には宝輪や数珠の他、斧、剣、弓矢、棒などの武器を携える一というのが正式のスタイルらしい(表紙図参照)。観音といえば慈悲の相をした母性的なお姿を連想するが、怒りの観音はめずらしい。怒りの仏さま不動明王にならって、馬頭明王などと呼ばれることもあったという。ともあれ、石仏としての馬頭さんはいつの間にやら像容を改め、縹渺としてどこか可愛げのただよう石仏特有の顔付に変わってゆく。日本人には怒り顔は馴染まないものとみえる。本来人間の守護神である馬頭が、馬の守護神に変わったのは、ひとえに頭に戴く宝馬のせいであるが、一種の誤解にもとづく転身なのである。

なんの為に建てる 造立の主旨は一つは馬の無病息災祈願と、更には死馬の慰霊である。従って造立の場所も馬交通の難所とか、馬捨馬とかが選ばれた。造立者は地域の有志連、馬持連、あるいは念仏講中など集団によるものが多かったが、時代が下るに従い、馬一般より、自分の持馬を対象にする個人的色彩が強くなり、果ては我家の愛馬の墓標として屋敷内に建てるようになった。村内に何軒かいた馬糞ぎ人(運送業者)は地域グループのメンバーとして、あるいは個人として造立に関与することが多かったようである。

いつの頃からはじまったか 庚申塔が江戸初期からさかんに造られたのに対し、馬頭観音の造立は江戸の中期頃からである。檜原村では享保元年(1716)が最初の造立というが、五日市では宝暦14年(1764)が上限である。庚申塔の造立は幕末にはめっきり少くなるが、馬頭さんは逆に幕末が最盛期で、昭和まで続く、五日市での下限は昭和16年である。これは庶民生活の中における馬の利

用度、馬交通の盛衰と深い拘わりがある。平地の手車地区より、山村の方が造塔が多いのは当然である。

1. 像馬頭と文字馬頭

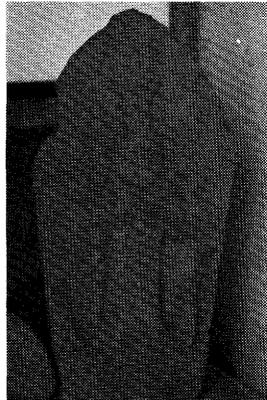
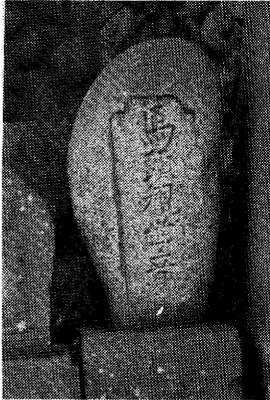
表1・2は五日市の大字(江戸時代の村)ごとに30年刻みで整理した馬頭観音の一覧表と分布図である。●は像を彫った馬頭さん、○は馬頭観世音と文字で彫った馬頭さんである。便宜上「像馬頭」「文字馬頭」と呼び分けることにする。

現在の五日市町は16の旧村から成立しているが、そのうち12か村に馬頭があった。数からいうと西部の戸倉、乙津、養沢に多い。山間部で馬の利用度が高いうえ、手頃な川石が手に入り易い地区である。この川石は極めて硬い砂岩で、切石にはならず、像を彫るのにも不向きである。そこで文字で間にあわすということになる。この地区には「文字馬頭」が圧倒的に多い。一方東部の伊奈、山田、網代地区では地元の伊奈石を使った「像馬頭」ばかりで、文字馬頭は1基しかない。伊奈石は軟かく切石に向き、像も彫り易い。その代り風化し易い欠点がある。(表1に多い年月不詳の●は風化の為である)。

表1を見て明らかなのは初期の馬頭はすべて「像馬頭」だということである。戸倉、乙津、養沢の山間部でも伊奈石製と推定される舟型の浮彫馬頭像Bを建てている。自然石の「文字馬頭」の初見Cは天保10年(1839)、「像馬頭」の終末Dは嘉永2年(1849)で、この頃が両者の入れ替り期である。東部地区ではこの嘉永2年以降馬頭さんの造立を見ない。なぜ東部の村々で、馬頭造立の風習が早々と廃れ、「文字馬頭」を造る風がなかったのか。伊奈、山田は大村で馬は結構いたはずである。また網代は西部地区に似た山村である。川石が入手難でも



▲B
▼左
C
▼右
D



伊奈石を使えばかえって楽に字が彫れる…。思うに昔の人の生活圏は意外に狭く、少しの隔りで相互の交流の殆どみられない地区があった。特に旧五日市村を挟む東西両地区間にはそのような状況があったと思われる。

2. 馬頭像のいろいろ

ところで、馬頭さんを石仏として見る場合、文字より像の馬頭に魅力があるのは否めない。前述したように正規の儀軌に従った馬頭像は忿怒相であるが、怒り顔は心やさしい日本人の情感にあわないうえ、技術的にも彫りにくいらしく殆ど見かけない。最も多い標準型は右の図の通り舟型の石に浮彫した立像である。塔形はみな小型で高さ50センチ、40センチ台が80%を占める。像容は頭に馬の首を戴く合掌形で、髪はオカッパ、顔は慈悲相、肩から下げた布(天衣)を腕にまき足元ま



でたらしている。その天衣の裾をピンと左右にはね上げているのが粋な感じである。馬の首は正面向きであるが、ときに横向きE(留原、持林)もある。石仏は細かい細工がにが手だから、馬の顔が犬や兔の顔になり、ときに鼠にみえるのもご愛嬌である。

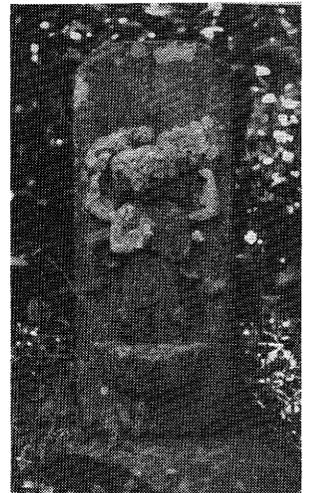
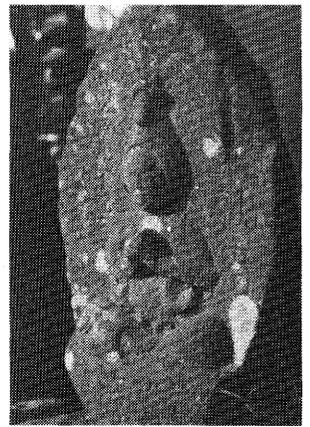
館谷正光寺の境内で、めずらしい忿怒相の小型馬頭Fを見つけた。ふくれっ面の童女(あぐら)が胡坐をかいているような、なんとも可愛い坐像であるが、年代をみると寛政9年(1797)と刻まれ、馬頭としては古い方(五日市では5番目)である。思うに忿怒型の名残りで、標準型に移行する過渡期的のものである。

また養沢本須の某空屋敷で「三面地藏」と呼ばれる像Gをみた。なるほどこれは三面六臂像である。髪は逆立ち手には宝輪その他武器らしきものを持っている。一見して庚申塔(しょうめんこんごう)の青面金剛像かと思っただが、庚申につきものの猿がない。天衣は馬頭風で、蓮華坐に乗っている。肝心の馬頭マークが見当たらないが、よく見ると頭のうえ馬頭のあるべき部分が欠けている。どうやら馬頭と判断して間違いなさそうである。年代は明和2年(1765)で、馬頭のうちで2番目に古く、初期忿怒型の別種である。

現在、馬頭さんは道路改修で位置をかえられ、



▲E 留原 ▼F 正光寺



▲G 養沢本須

寺の墓地、人家のたて込む火の見楼の下、地区のクラブや集会所の空地などに集められている。本来なら細々とした野道や峠道のスキの影などにひっそりと据えられるのが似つかわしい。馬方に手綱てなづなとられた馬がその傍をポコポコと歩むとき、はじめて絵になる。

3. 造立者のこころ

五日市地区70基の馬頭を造立者別にみると、個人（親子兄弟等を含む）32、講中・有志17、不明21になる。不明の中には風化欠損によるものと、あえて記名を要しない性格のものがあるようだ。

造立者はやはり個人が多いが、個人の持馬供養が多くなった明治以降を除き、江戸時代に限ってみると、個人13基、講中13基と同数になる。

講中には、観音講、馬頭講、馬持連中、女人講、念仏講などがみえ、地区有志には村より小さな小字こあざ集団が多く、昔の人の生活圏がよくわかる。庚申塔や念仏塔月待塔は造立した講中が定期会合（お日待）を持つのが習いである一いや定期会合をもつグループがその結集のあかしに建設したものであるが、馬頭の場合は趣が違う。例えば馬交通の難所に造立すればそれで馬の安全を祈る主旨は一応完了し、講中は出資集団にとどまる。実は江戸期の馬頭講などの実態はよくわからないので立入った言及は避けたいが、馬持連などは一種の同業者の仲間集団を結成していたことが想像される。昭和初期まで行われた「馬持」うまもち＝阿伎留

神社境内4月10日、大悲願寺境内4月21日＝はその系譜の人々が主催した行事であったようだ。女人講や念仏講中が係わるのは人間に最も近い生きもの馬への愛情が、死馬の菩提をともらう心情ともなり造塔を行ったものと推察される。

個人造立の馬頭さんが小型なのに対し集団で建てる馬頭さんにはときに大型の

ものが混る。もっとも「像馬頭」は型がきまっているので大石を運んで「文字馬頭」を建てる。Hは養沢川の上流、狭い谷道に建つ。弘化4年（1847）の造立。養沢の人々は馬の手綱をとってこの谷道を往き来しながら、自分の仕立てた杉山が日一日と育ってゆくの何よりの楽しみにしたという。

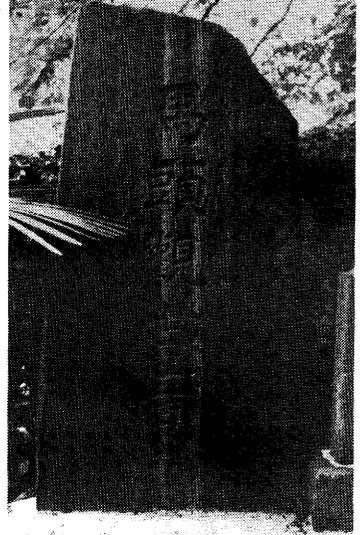
駄賃稼ぎの汗も、緑

▲I
の山肌やまはだに拭われる思いがしたであろう。Iは昭和9年秋川橋の北（現在は玉林寺地藏堂に移築）に建った。昭和9年といえば既にトラック輸送がはじまっているが、当地ではまだ四輪の馬力車も活発に稼いでいた。150センチの仙台石の裏面には97名の寄付者名がある。代表者五王バス社長石川虎一郎。恐らく去りゆく馬交通時代のフィナーレを飾る建碑だったろう。

最後に五日市一八王子をつなぐ小峰峠山頂の「文字馬頭」Jについて語ろう。これは伊奈石の笠付角柱に九輪

▲J
まで付けた立派な塔である。総高（九輪より蓮華坐まで）205センチ、文字彫りもていねいで「文政五（1822）壬午八月吉日」とある。「文字馬頭」としては最も早い。聞くところによると小峰峠西側の谷＝芹沢は馬捨馬であったという。

造立者は「隣村講中四十貳人」とあり匿名である。馬時代の社会にはそれなりに深い陰があった。この塔はそれを物語る。



▲H



▲J